

研究論文

淡輪遺跡出土土器について

森本隆寛

要 旨

現在、北白川上層式細別の研究の中では、まとまった量が出土した淡輪遺跡出土の土器がその指標の資料として選定されている。今回報告するものは、既存報告で記載されていなかった北白川上層式のおおよそ2期及び3期を中心に確認出来たものである。目的として、既存報告以外の土器の図化し、同遺跡から確認出来ていなかった種類のものを確認していく。

キーワード：縄文時代 関西地方 北白川上層式

はじめに

淡輪遺跡は大阪府泉南郡岬町淡輪に位置する遺跡である。1980（昭和55）、1986（昭和61）年の発掘調査で主に縄文時代後期前葉から中葉にあたる北白川上層式の時代の縄文土器が多数出土した。

2003年（平成15）頃に修士論文作成のため資料を閲覧させて頂き、その際に報告書に未掲載のものを一部実測させて頂いた。今回、本論集のご案内を頂いた折、当時の実測資料の紹介で掲載させて頂こうと2024年5月に再度閲覧をお願いした。しかし、さらに未掲載のものを確認したため追加の実測を行なった。

20年前のものと今回の資料を併せて報告し、該当の時期の資料を増やし、今後のさらなる研究の一端として寄与出来ればと思う。

1. 出土遺物の観察と分類について

各土器の注記には「TN」の次が数字3ヶタのものと「TN86」から始まるものがあった。収納コンテナの記載などから前者が1980（昭和55）年、後者は1986（昭和61）年調査だと思われる。注記も無いものも確認している¹⁾。

以下の数字と土器のキャプションの数字は対応する。土器の分類については『淡輪遺跡発掘調査概要報告書VIII』の分類に則り分類する（図4）。深鉢A2（1～12、19）、深鉢A3（13～15）、深鉢A胴部（16～18、20～31）、深鉢D3（43、44）、鉢A2（34）、鉢C2（32、33）、鉢（口縁部なし36）、浅鉢（35、37～40）、注口土器（45、46）と分類した²⁾。

また、1～46までは全て大阪府教育委員会所蔵資料である。

1. 緩やかに内湾する波状口縁の波頂部である。2段の渦巻文のS字を中心に多重の沈線で囲い、上段は口縁部に沿った4本の沈線で左右に連結する。下段は渦巻文の下部に3本沈線を連結する。沈線内を中心に縄文LRにて充填し、沈線外をナデで磨り消している。茶褐色で長石等が混じる。TN86-1-037の注記。
2. 緩やかに内湾する波状口縁の波頂部である。入組文を中心に多重の沈線で囲い、口縁部に沿った3本の沈線で左に連結する。沈線内を中心に縄文LRにて充填し、沈線外をナデで磨り消している。茶褐色で長石等が混じる。TN86-1-013の注記。
3. 緩やかに内湾する波状口縁の波頂部である。入組文を中心に多重の沈線で囲う。摩耗が激しいため施文は確認出来ない。茶褐色で長石等が混じる。TN86-1-013の注記。
4. 緩やかに内湾する波状口縁の波頂部から波底部である。2段の入組文を中心に多重の沈線で囲い、上部は口縁部に沿った3本の沈線で右に連結し、波底部の単位文に向かうが、沈線同士が途中で連結、もしくは切れる。下段は波底部より連結し伸びる平行沈線には接続しないようである。沈線内を中心に縄文LRにて充填し、沈線外をナデで磨り消している。茶褐色で長石等が混じる。TN055の注記。
5. 波状口縁の波底部と思われる。二の字に半円を上下に挟み込んだようなダルマ形の単位文となっており、口縁部に沿った3本の沈線で左に連結する。沈線内を中心に縄文LRにて充填し、沈線外をナデで磨り消しているが、摩耗により明瞭には判別

- 出来ない。TN86-1-037 の注記。
6. 強く内湾する波状口縁の波頂部である。棒状の施文具で深く明瞭な沈線を引く。左からの 3 本の沈線を 1 番上は口縁部に沿って右側へ通じる。2 本目は中心の渦巻文の外周を巡り 3 本目に接続するようであり、3 本目自体で渦巻文を形成する。右側は新しく 2 本沈線が発生し口縁へ沿って行く。渦巻文の下部分に平行沈線が施文される。渦巻文の上部には施文具による刺突がある。沈線内を中心縁部に沿って伸びる沈線と器形に平行な 2 本の沈線で施文される。縄文 LR に施文が確認出来るが、摩耗により明瞭には判別出来ない。茶褐色で長石等が混じる。他の波状口縁の個体より器壁がやや厚い。
 12. 内湾する波状口縁の波頂部付近である。円形で口縁部に沿って伸びる沈線と器形に平行な 2 本の沈線で施文される。縄文 LR に施文が確認出来るが、摩耗により明瞭には判別出来ない。茶褐色で長石等が混じる。他の波状口縁の個体より器壁がやや厚い。TN86-1-036 の注記。
 13. 内湾する波状口縁の波頂部付近である。やや湾曲する縦に 2 段の沈線で、沈線の各終点に刺突がある。口縁部に沿った 2 本の沈線が引かれ、左隈の刺突の終わり部分から若干肥厚し、反対側も刺突があり沈線が続くように推察される。無文であり明るい灰褐色で長石等が混じる。TN030 (末尾 0 が不明瞭) の注記。
 14. 内湾する波状口縁の波頂部である。2 段となる渦巻文で同心円が多重化している。沈線は各終点で刺突を行なうものがある。無文であり明るい灰褐色である。TN86-1-203 の注記。
 15. 内湾する波状口縁の波頂部と思われる。同心円で多重化し 4 本の沈線が接続する。沈線は各終点で刺突を行なう。無文であり茶褐色である。TN049 の注記。
 16. 単位文が 2 段で入組み、下部は上部より小さい。胴部に沈線が平行に配置され一部が単位文に接続する。同様の構成が胴部の下記にも配され、文様帯が 2 段となっている。縄文 LR にて充填し、沈線外をナデで磨り消している。赤褐色で長石等の礫が混じる。
 17. 左の単位文は左側から沈線で横 J 字を多重に囲い、右側の単位文に接続する。右の単位文は渦巻文を多重に囲む。棒状の施文具で明瞭な沈線を引き、一部沈線の終点に刺突を施す。また、それぞれ単位文の上に小さな刺突がある。頸部部分を沈線で区切り、下の縄文帯から段が出来る。沈線内を中心縁部に沿って伸びる沈線と器形に平行な 2 本の沈線で施文される。縄文 LR にて充填し、沈線外をナデで丁寧に磨り消している。明るい淡黄色で比較的大きめの礫等が混じる。6・7・18 と同一個体と思われる。TN081 の注記。
 18. 単位文は左側から沈線で渦巻文を造り多重に囲む。その他は 17 と同様。6・7・17 と同一個体と思われる。TN081 の注記。
 19. 単位文は同心円状で頸部を平行に巡る 3 本沈線に接続し、S 字沈線が横断する。斜めに単位文の下

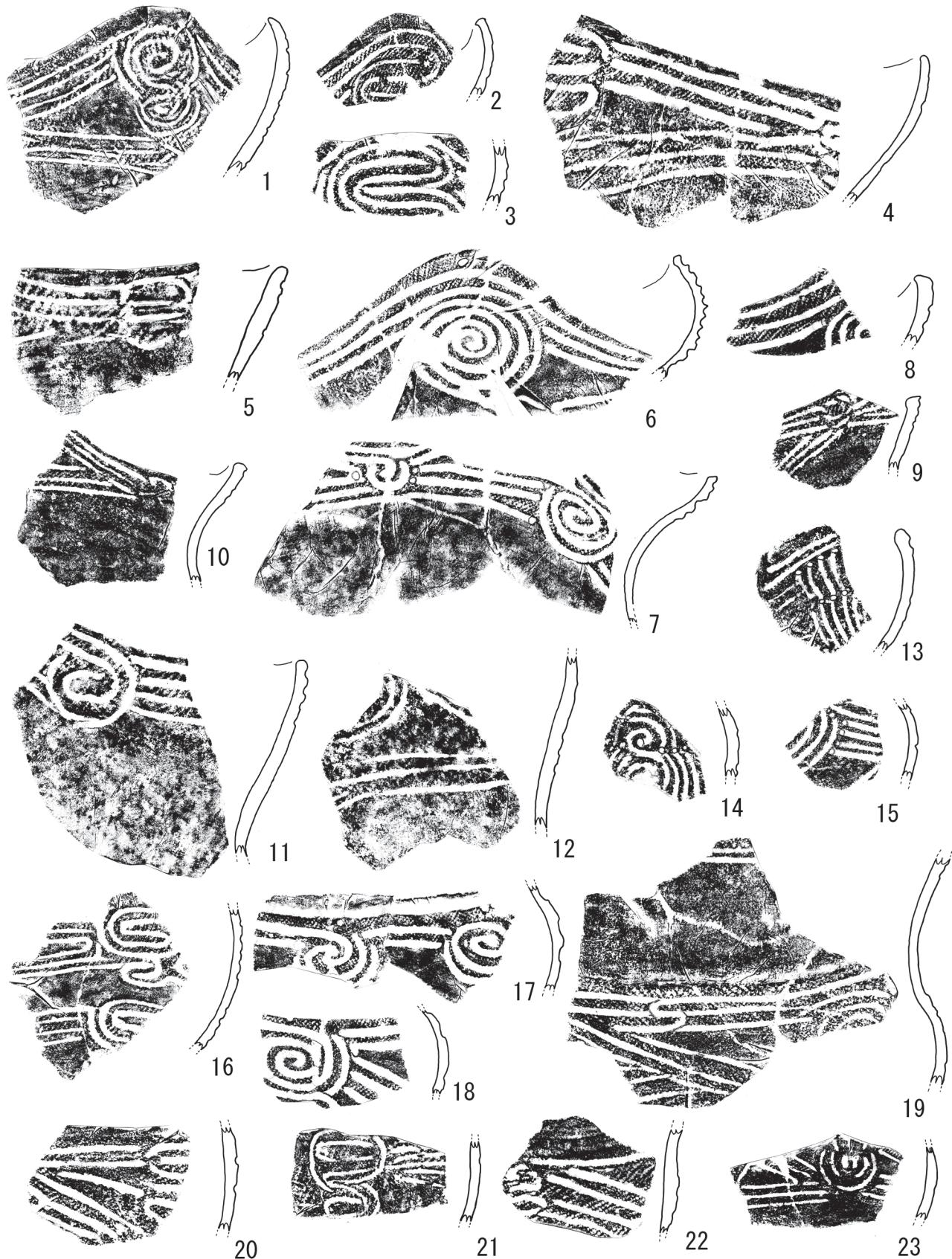


図1 報告資料

0 (S=1/3) 10cm

部に接続する 3 本沈線が巡る。頸部は強くナデもなくはけずったようで段があり、段下に縄文を施文する。口縁部は 2 本沈線と縄文で施文されている。おそらく平口縁と思われる。縄文 RL にて充填し、沈線外をナデで磨り消しているが、摩耗により明瞭には判別出来ない。黒褐色で礫が混じる。

20. 単位文は一の字と上下を半円で囲い、楕円等で構成する。左から 2 から 3 本の沈線で接続する。沈線内を中心に縄文 LR にて充填し、沈線外をナデで磨り消しているが、摩耗により明瞭には判別出来ない。茶褐色で長石等が混じる。TN86-1-013 の注記。

21. 単位文は二の字と上下を半円で囲い、楕円等で構成し下段にも連結する。右から 3 本の沈線で接続する。沈線は浅い。沈線内を中心に縄文 LR にて充填し、沈線外をナデで磨り消しているが、摩耗により明瞭には判別出来ない。TN86-1-037 の注記。

22. 単位文は複数の蛇行文が縦に連続しており、斜めの沈線が連結する。沈線は浅く施文されている。沈線内を中心に縄文 LR にて充填している。茶褐色で長石等が混じる。TN86-1-01 ? (末尾 1 ケタが不明瞭) の注記。

23. 単位文は同心円で左右から沈線で接続する。沈線は浅い。沈線内を中心に縄文 LR にて充填している。茶褐色で長石等が混じる。TN86-1-013 の注記。

24. 単位文は複数の S 字が連続する蛇行文 2 本で構成され、上部には頸部に平行な左側からの 3 本の沈線が接続し、単位文から右下方向へ連続していくようである。下段は左上から右下へ単位文へ接続する。沈線内を中心に縄文 LR にて充填し、沈線外をナデで磨り消している。黄褐色で長石等が混じる。

25. 単位文は S 字の蛇行文が上部の沈線から伸びる。沈線内を中心に縄文 LR にて充填している。茶褐色で長石等が混じる。TN86-1-045 の注記。

26. 単位文は二の字を円で囲い右に沈線が連続する。浅い沈線は浅い。縄文 LR にて充填し、沈線外をナデで磨り消している。

27. 単位文は半円の同心円で右に 3 本の沈線が連続し、下部にも同様の沈線が施文される。縄文 LR にて充填し、沈線外をナデで磨り消している。

28. 脳部に幅広く不定形な蛇行線を引き頸部より脳部に縄文 LR にて全面に施文する。淡黄褐色で礫等

が混じる。TN349 の注記。

29. 頸部に平行な沈線に接続して、下に 2 本沈線が蛇行する施文があり、頸部より脳部に縄文 LR にて全面に施文する。淡黄褐色で長石等が混じる。TN349 の注記。
30. 頸部に沿って平行に 2 本沿って沈線が引かれ途中に沈線内に 2 個刺突が確認出来る。沈線下には斜めに 2 本沈線が引かれ脳部に縄文 RL にて全面に施文され一部刷り消している。一部沈線内に刺突がある。茶褐色で長石等が混じる。TN86-1-037 の注記。
31. 単位文は縦に 3 本の沈線を引き、その上下に 2 本づつの平行の沈線を引く。左上から右下への複数の沈線を引く。縄文 LR にて充填し、ナデで磨り消している。茶褐色で長石等が混じる。TN86-1-055 の注記。
32. 頸部より脳部下部まで施文される。横 J 字形だが沈線が中心で切れている。斜めに走る沈線で三角形の構図をとる。口縁部形状はやや外反し脳部より厚くなり口唇部分は緩やかに細くなる。脳部に縄文 RL にて施文され一部刷り消している。淡黄褐色でオレンジに近い部分は丹である可能性がある。TN338-1 の注記。
33. 横 J 字形だが沈線が中心で切れており、その中心部を外周し 2 本の沈線が巡っているため 34 とやや構図が異なる。TN338-2 の注記。
34. 32・33 と似た構図だが頸部を区切る沈線が無い。口縁部外部分は縄文で施文される。口縁部が一部肥厚し中央に沈線を縦に引き、その両側を口縁部に沿って沈線を引く。裏面も沈線を楕円に引く。肥厚部にも縄文が施文される。脳部に縄文 RL にて施文され一部刷り消している。淡黄褐色で口縁部と口縁部裏の肥厚部分は丹が塗布されている。TN405 の注記。
35. 口縁部から屈曲する鉢である。楕円と U 字の沈線と口縁部に平行な四角となる沈線が引かれ、その上下に沈線が巡る。口縁部に立体的な横 8 字型の突起が付属する。無文で黄褐色、長石等が混じる。
36. 脳部が屈曲する鉢形のようである。屈曲部上部に 3 本の沈線が平行に引かれ、中央に同心円が施文される。縄文 LR にて施文され一部刷り消している。
37. 鉢形の口縁部のようである。単位文は円形で二重の沈線が確認出来、左側から 3 本の沈線が連結す

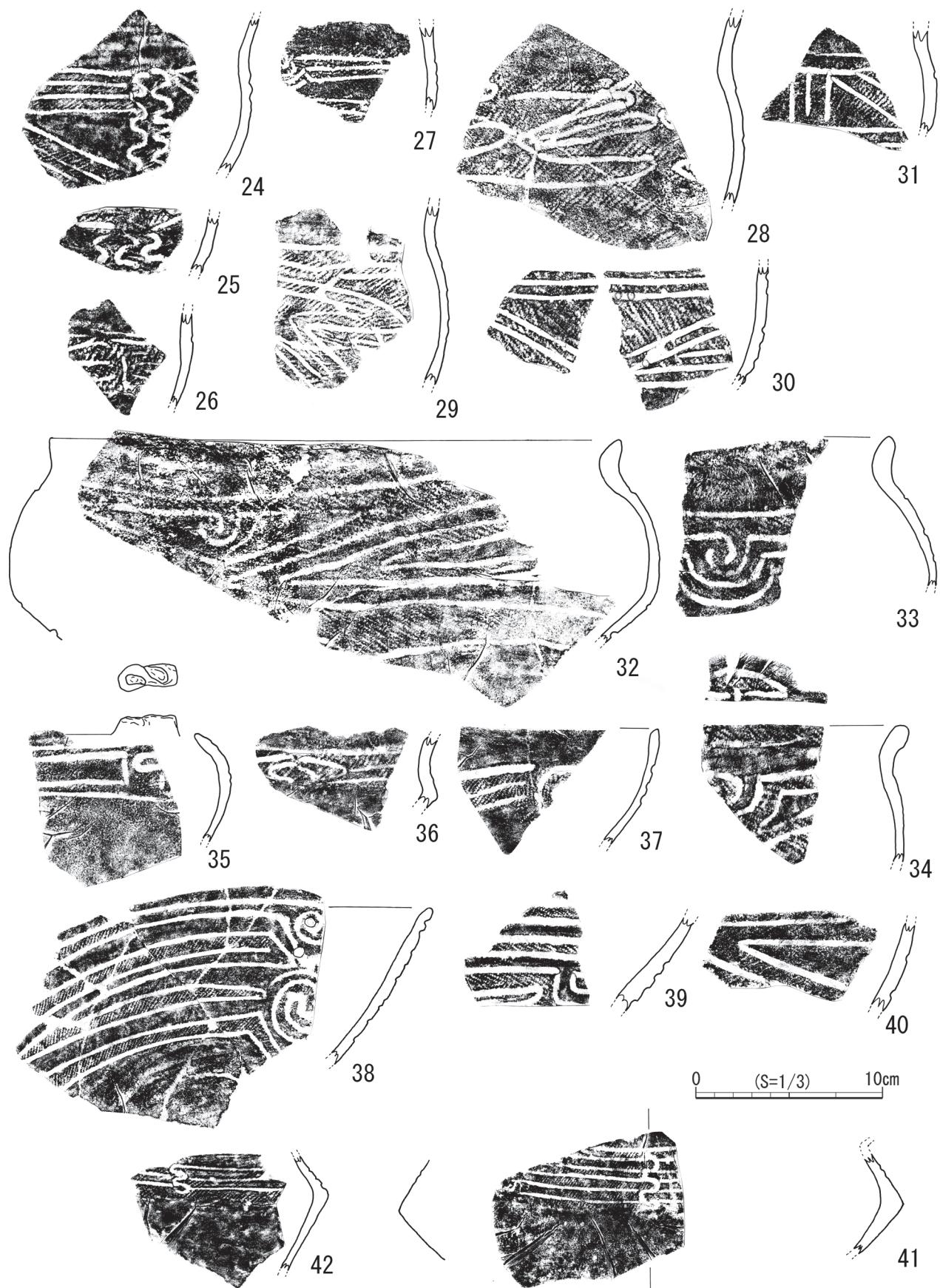


図2 報告資料

- る。沈線内を中心に縄文 LR にて充填している。茶褐色で長石等が混じる。TN214 の注記。
38. 浅鉢の口縁部である。単位文は渦巻を 2 段配し、2 本単位の沈線の縄文帯は渦巻を外周する。沈線内に刺突がある。沈線内を中心に縄文 LR にて充填し、無文部は丁寧にナデて磨り消している。茶褐色で長石等が混じる。
39. 浅鉢の破片である。明瞭な沈線でクランク状のモチーフを取る。沈線内を中心に縄文 RL にて充填し、無文部は丁寧にナデて磨り消している。
40. 浅鉢の破片と思われる。三角形のモチーフを取る。沈線内を中心に縄文 LR にて充填し、無文部は丁寧にナデて磨り消している。一部に丹が確認される。TN429 の注記。
41. 頸部が外反し胴部から下部に逆くの字になる深鉢のようである。断面図には見えないが上部の頸部が外反する。胴部上半は 6 本の沈線が平行に引かれ、縦に蛇行文の沈線を施す。沈線内を中心に縄文 LR にて充填し、屈曲部までは縄文を施す。赤みのある茶褐色で長石等が混じる。
42. 器形と施文は 41 と同様で 3 本の沈線が平行に引かれ間に蛇行文の沈線を施す。
43. 外反する深鉢の口縁部から胴部である。口縁部に 3 本を基調とする平行な沈線と三角のモチーフを造る沈線で構成される。突起部分は三角形に造られ、右側の円形の真ん中に刺突される。沈線内を中心に縄文 LR にて充填している。茶褐色で長石等が混じる。
44. 朝顔形になる深鉢の胴部である。胴部に平行の 5 本の沈線を引き、半円を組み合わせ、途切れる蛇行文を縦に施す。沈線内を中心に縄文 LR にて充填しているが摩耗により明瞭には判別出来ない。茶褐色で長石等が混じる。
45. 注口土器の上部である。細い沈線の間を一部連続して刺突する。C の字の沈線施文がある。明黄褐色で無文である。TN339 の注記。
46. 注口土器の上部と思われる。棒状の施文具で複数本の沈線を平行に引き、下部も同様に施す。裏面はやや粗雑にナデ調整され凹凸が見られる。茶褐色で無文部もナデで調整される。

2. 土器型式編年中の淡輪遺跡出土の位置について

淡輪遺跡出土のものが、今までの土器型式編年の研究にて、どの位置に取り上げられて来たかを確認す

る。

渡辺昌宏が淡輪遺跡出土ものを中津式より一乗寺 K I 式に分類し、図示した（渡辺 1983）。

泉拓良が北白川上層式 2 期（縁帶文土器様式「第 1 様式 b 期」と 3 期（「第 1 様式 c1 期」と「c2 期」）を、「縦割り文様の a 期、横割り文様の c 期、その中間的様相の b 期」の有文深鉢胴部文様を元に細分の説明をしている。また c 期は渦巻文が蛇行沈線に変化し時間的差異があるものとして 2 細分された。2 期に鉢型、3 期には深鉢をそれぞれ胴部文様の細分を元にした深鉢の淡輪遺跡の土器を配置している（泉 1989）³⁾。

鈴木正博は、上記の渡辺 1983 が「一乗寺 K I 式」としたものを「淡輪式」とし、それに続く「且来 I 式」と共に、従来の「北白川上層式 3 期」と「一乗寺 K 式」の間に配置されるものとした（鈴木 1999）⁴⁾。

その後、北白川上層式 3 期が 3 細分出来るとされ（玉田・岡田 2010、千葉 2014、千葉 2015）、続く一乗寺 K 式との間も論考されてきた（千葉 2014、小泉 2014）。

岡田憲一は、佃遺跡及び一乗寺向畠町遺跡等の分析より北白川上層式 3 期の 3 細分の 2 段階目の内湾する波状口縁深鉢を「桑飼下型」、3 細分の 3 段階目を「佃下層期」とし同深鉢を「上島野型」と「佃下層型」に分類した（岡田 2020）。淡輪遺跡出土土器の渦巻文、蛇行文で磨消縄文があるものを「桑飼下型」、末端部沈線があるものを「上島野型」として淡輪遺跡のものをそれぞれ比定している。

3. 若干の考察について

（1）既存報告で類例が確認出来ないもの

単位文が 1・2・3 の「S 字」もしくは「つ、逆つの字」を組み合わせたような渦巻、入組文に比べ、4・5・20・21・26 は沈線が途切れ簡素化するものが新たに確認される。

6 の大型な渦巻文、7・17・18 の左右の横帯の沈線からそのまま続く渦巻、横 J 字のものも新たに確認出来た。また、6・7・17・18 は胎土と沈線施文が類似しており、接合はしないが同一個体ではないかと思われ、沈線の起点もしくは終点で刺突が確認出来る箇所が複数ある。また 6・17・18 のそれぞれの単位文の上に小さな刺突が共通して確認される。47 の上島野遺跡のようなものに近い。

28・29 の不定形で左右に広く蛇行されるものが確認された。49（1986 年報告第 20 図-110）で同様のモチーフがみられるが、28・29 は沈線のみで、49 は沈線内を細かく刺突している。上島野遺跡などにも類例

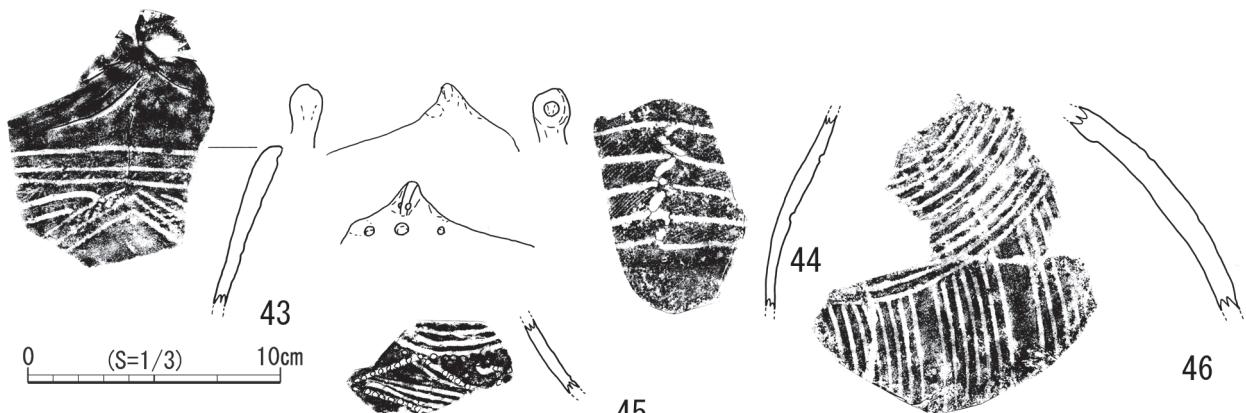


図3 報告資料

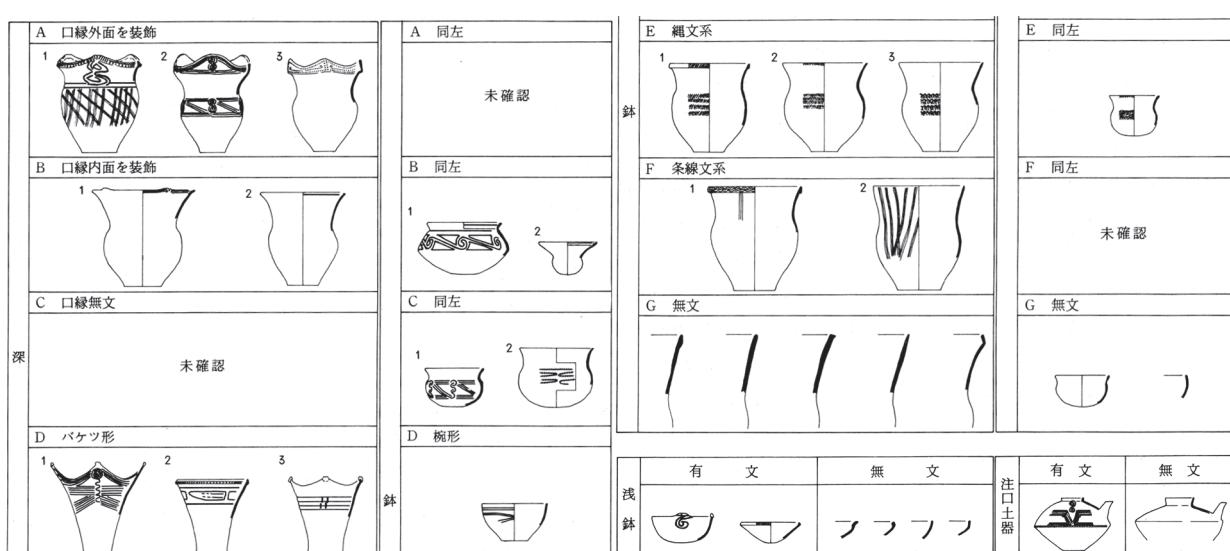


図4 繩文土器分類概念図 (大阪府教 1987 より転載、合成)

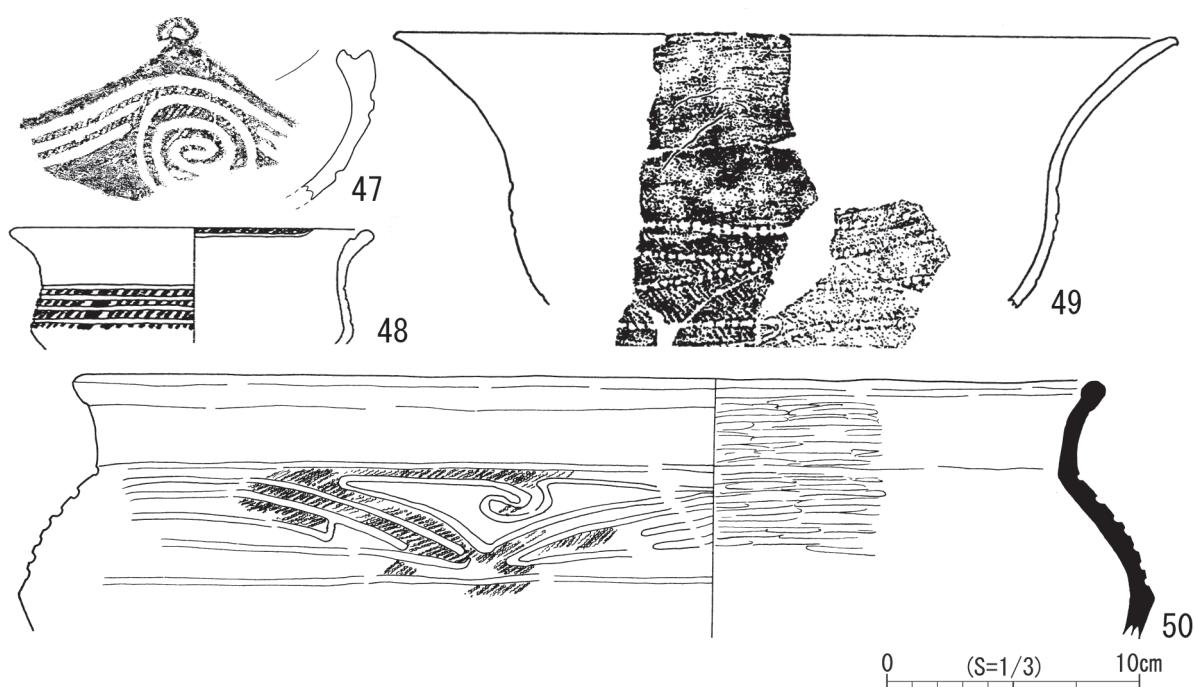


図5 参考資料 (47:奈良・上島野、48・49:大阪・淡輪、50:滋賀・正楽寺)

がみられる。

32・33・34 の胴部文様及び 34 の肥厚部が九州から四国の鉢形の文様に類似する。また関西地方では、口縁部形態は異なるが滋賀県正樂寺遺跡で 50 のような胴部文様が類似する鉢がある。

38 は、深鉢の胴部文様の単位文に類似するような施文であるが、桑飼下遺跡などでも構成要素が似た浅鉢は確認出来る⁵⁾。

41・42 は 48 (1981 年報告第 15 図-4) のような胴部がくの字となる鉢形のようでもあるが、蛇行文を施文する同様の器形のものは淡輪遺跡では確認出来ていない。

43 は関東の堀之内 2 式最終末から加曾利 B1 式、44 は加曾利 B1 式のものに類似する。

45 は沈線内刺突が北白川上層式 3 期でも新しい要素であり、既存報告の注口土器の中でもより新しいものだと判断できる。

(2) 編年位置について

岡田 2020 の北白川上層式 3 期を 3 段階の細分とした場合、沈線と縄文施文が主体の 1~5・8・9・10~12・16・19~27・31 に関しては 2 段階目に位置付けられると思われる。3 段階目は、沈線内刺突のある 13~15・30 が該当すると思われる。沈線内刺突がまばらにみられるもの (6・7・17・18・38)、2 段階の胴部よりモチーフが崩れてしまっているもの (28・29) は、3 段階目により近い要素が含まれていると考える。32・33・34 は類似する 50 の正樂寺遺跡の出土状況からは北白川上層式 2 期の位置となる。

おわりに

現在、内湾する波状口縁深鉢の出現が北白川上層式 3 期の 1 段階目と 2 段階目の指標となっているが、その型式学的な系統が整理しきれていない。また、山陽から関西、北陸、東海の同時期に内湾する波状口縁深鉢や浅鉢などに類似性がみられ、各地域の編年的な細分の併行関係や関係性も問題点として残っている。

今回の報告で淡輪遺跡出土の北白川上層式 3 期の時期に新たに資料を提示することが出来た。今回の資料によって上記問題点の解明に多少の寄与が出来るものと考えたい。

最後に、今回の資料報告に際し、大阪府教育庁文化財保護課に閲覧および掲載のご許可に関して、多大なるお手数おかけし、ご高配を頂きました事を感謝申し上げます。

また、本報告に際し、小澤政彦、小泉翔太、鯉渕義紀、渡辺幸奈にご教授頂き感謝申し上げます（敬称略）。

献辞

矢野先生には他大学の学生にも関わらず研究会、宮崎遺跡の発掘調査でも多大にご指導頂き誠に感謝申し上げます。これからのお先生のご健勝とご多幸をお祈り申し上げます。

註

- 1) 筆者の確認不足や記載漏れがあるかもしれないがご容赦願いたい。
- 2) 紙幅の都合により各分類の記載は大阪府教 1987 を参照されたい。
- 3) 泉 1980 の中で淡輪遺跡の「櫛描文注口土器」について記載があるが、当時まだ報告書が刊行前のためか具体的な図示は無い。
- 4) 鈴木が「淡輪式」及び「且来 I 式」の詳細をこれ以降で言及している論文等は確認出来なかった。
- 5) 同時期にあたる津島岡大遺跡（岡山）、百間川遺跡（岡山）、八王子貝塚（愛知）などもその地域の胴部文様と同じ構成を取る浅鉢が確認出来る。

挿図出典

図 1~3 筆者実測、作成。大阪府教育委員会所蔵資料

図 4 大阪府教 1987 より転載、合成

図 5 47：村上、石田、近藤他 2004、48：大阪府教委 1981、49：大阪府教委 1986、50：能登川教委 1996 より転載

引用・参考文献

泉拓良 1980 「第 7 章 北白川上層式土器の細分—京都大学教養部構内 AO24 区出土の縄文土器を中心に—」『京都大学構内遺跡調査研究年報 54』京都大学農学部構内遺跡調査会 53~60 頁

泉拓良 1989 「縄文土器様式」『縄文土器大観 4 後期 晩期統縄文』小学館 273~275 頁

大阪府教育委員会 1981 『淡輪遺跡発掘調査概要Ⅲ』大阪府教育委員会

大阪府教育委員会 1987 『淡輪遺跡発掘調査概要報告書Ⅷ』大阪府教育委員会

岡田憲一 2020 「平行磨消縄文土器群」の成立：北白川上層式と元住吉山式のあいだ』『関西縄文時代研究の泉を拓く 関西縄文論集 4』 関西縄文文化研究会

21-38 頁

小泉翔太 2014「第 2 節 北部地区・南部地区出土土器の位置づけ」『京都市一乗寺向畠町遺跡 繩文時代資料 考察編』 京都大学大学院文学研究科 33-50 頁
鈴木正博 1999 「「先史考古学の復権」をめざす「笑う郷土史家」シリーズ(第 1 話) —「且来 I」は「キメラ」ではない! —」『利根川』20 利根川同人会 29-35 頁

玉田芳英・岡田憲一 2010「各地域の土器編年 5. 近畿」『西日本の縄文土器 後期』 真陽社 206-210 頁

千葉豊 2014「第 1 節 比叡山西南麓遺跡群における縄文後期土器の様相」『京都市一乗寺向畠町遺跡 繩文時代資料 考察編』 京都大学大学院文学研究科 23

-32 頁

千葉豊 2015 「北白川上層式と八王子式」『八王子式土器: 西尾市八王子貝塚出土土器: 東海縄文研究会第 12 回研究会(愛知 4)』東海縄文研究会 29-38 頁
能登川町教育委員会 1996 『正楽寺遺跡: 縄文後期集落の調査 能登川町埋蔵文化財調査報告書』能登川町教育委員会編, 第 40 集』能登川町教育委員会
村上昇・石田由紀子・近藤奈央ほか 2004 「IV. 収集・保管資料(五條市内の遺跡)(1) 上島野遺跡」『市立五條文化博物館資料目録 堤昭二氏収集考古資料を中心』市立五條文化博物館 52-79 頁
渡辺昌宏 1983 「縄文時代の淡輪」『揖河泉文化資料』第 32 号 北村文庫会 1-23 頁

